

県内の夏のボーナス動向と暮らし向きについて

～「2024年夏季ボーナス及び暮らし向き」アンケート調査から～



福島の進路 2024年7月

<要旨>

1. 今年の夏のボーナスについて

(1) 2024年の受取見込額の対前年比増減をみると、「変わらない」が46.4%（前年比△8.0㊦）と約半数になっている。「増える」と回答した割合は2割弱に留まっており、全体的な支給環境の改善には至っていない。

(2) ボーナス受取見込額の金額階層別の前年比を比較すると、40万未満の階層では、「減る」の割合が「増える」を上回った。一方、40万円以上の階層では、「減る」が「増える」を上回っており、ボーナス支給額の差が広がっている。

(3) ボーナスの使い道の上位3位をみると、「貯蓄」が65.8%（前年比△2.5㊦）、「買物」が29.8%（同△0.7㊦）、「生活費の補填」が24.7%（同△4.4㊦）となり、前年同様、「貯蓄」が7割近くとなった。投資の割合も増えており、貯蓄と含め、将来に備えた準備をする割合が増えている。

2. 暮らし向きについて

(1) 1年前と比べた現在の暮らし向きをみると、「変わらない」が58.0%（前年比+2.8㊦）で最も高く、次いで「悪くなった」が34.5%（同△1.3㊦）、「良くなった」が7.5%（同△1.5㊦）となった。前年よりも「良くなった」「悪くなった」の割合が低下し、「変わらない」が上昇している。

(2) 今後1年間の消費支出をみると、「変わらない」が48.6%（前年比+0.1㊦）と最も高く、前年と比較すると、「増やす予定」が低下し、「減らす予定」が上昇している。今後1年間の暮らし向きが変わらないか、もしくは悪化する見通しから、総じて消費支出を減らす意向が強まっているものと思われる。

3. 賃上げと物価高による家計への影響について

(1) 今春の賃上げ実施状況は、「変わらない」が59.1%と最も多く、次いで「引上げられた（引上げ予定）」が32.9%、「引下げられた（引下げ予定）」が7.3%の順となった。「引上げられた（引上げ予定）」は、3割程度に留まっており、6割は賃金が変わっていない。

(2) 賃上げの実施額は、10,000円未満の賃上げ額が半数、10,000円以上20,000円未満の賃上げ額が、2割程度となっている。

(3) 1カ月当たりの家計費用負担額が、10,000円以上増加した割合は、6割弱に及んでいる。

○ 調査要領

1. 調査方法 民間調査会社によるWeb調査
2. 調査実施期間 2024年5月1日～5月15日
3. 回答者 福島県内に居住する民間企業の正社員・公務員等427人
 - ① 性別構成比 男性：50.1% 女性：49.9%
 - ② 年齢別構成比

| 年齢 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 計 |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 構成比 | 21.3% | 21.5% | 21.3% | 22.0% | 13.8% | 100.0% |

はじめに

ここ数年、原材料価格の高騰や円安による輸入コストの増加により様々な商品、サービスで価格が上昇している。その一方、物価変動の影響を除いた実質賃金は減少しており、物価上昇の影響が企業ばかりか、県民生活にもマイナス影響を及ぼしている。

このような状況下で、当研究所は、夏季ボーナスの支給額を推計するとともに、定例のアンケートを実施し、県内給与所得者のボーナスの使い道や暮らし向きなどについて調査した。

I 2024年夏季ボーナス

1. 2024年夏季ボーナス推計

当研究所の試算によると、県内の2024年夏季ボーナス総支給額は民間企業・官公庁合計で2,091億4百万円（前年比+2.8%）と2年ぶりに前年比増と推計される。

次に、民間・官公庁別にみると、民間企業の1人当たりボーナス支給額は、所定内給与と支給月数の増加により2年ぶりに前年を上回り、総支給額は、支給対象者が減少しているものの、1人あたり支給額が増加することから、2年ぶりに増加する見込みである。

一方、官公庁の1人当たりボーナス支給額は、人事院勧告による支給月数の増加などにより、2年連続で増加し、総支給額では、職員数の増加もあり、2年連続で増加する見込みである（図表1、2）。

図表1 県内企業および官公庁の2024年夏季ボーナス総支給額推計

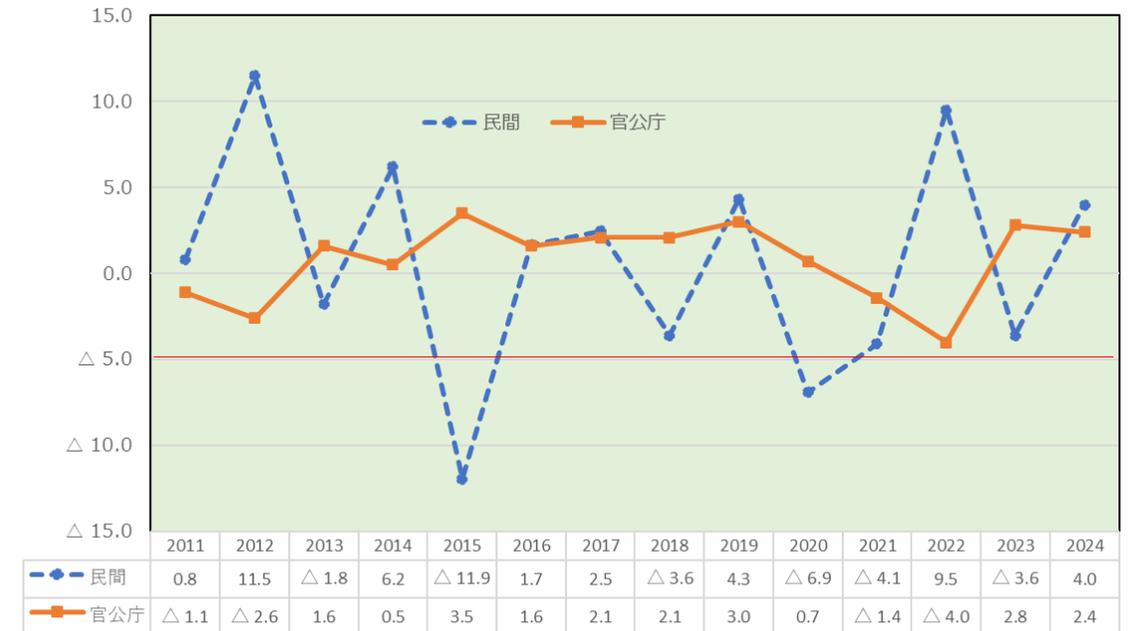
| | 2022年夏季 | 2023年夏季 | 2024年夏季 | |
|-------|-------------|-------------|-------------|--------------------|
| | | | 前年比増減 | 前年比増減率 |
| 総支給額 | 209,758 百万円 | 203,416 百万円 | 209,104 百万円 | 5,688 百万円 2.8 % |
| 民間企業 | 172,334 百万円 | 165,383 百万円 | 169,750 百万円 | 4,367 百万円 2.6 % |
| 1人当たり | 302,153 円 | 291,153 円 | 302,727 円 | 11,574 円 4.0 % |
| 官公庁 | 37,424 百万円 | 38,033 百万円 | 39,354 百万円 | 1,321 百万円 3.5 % |
| 1人当たり | 815,462 円 | 838,064 円 | 858,264 円 | 20,200 円 2.4 % |

資料：福島県「毎月勤労統計調査」などにより当研究所作成。

注：2022年および2023年の民間企業は、福島県「毎月勤労統計調査」により再計算。

民間企業のボーナス支給対象者は、パートタイム労働者を除く一般労働者。

図表2 福島県内の夏季ボーナス1人当たり支給額伸び率



資料：福島県「毎月勤労統計調査」などにより当研究所作成

2. 夏季ボーナスについてのアンケート調査結果

(1) 受取見込額の増減

A. 全体

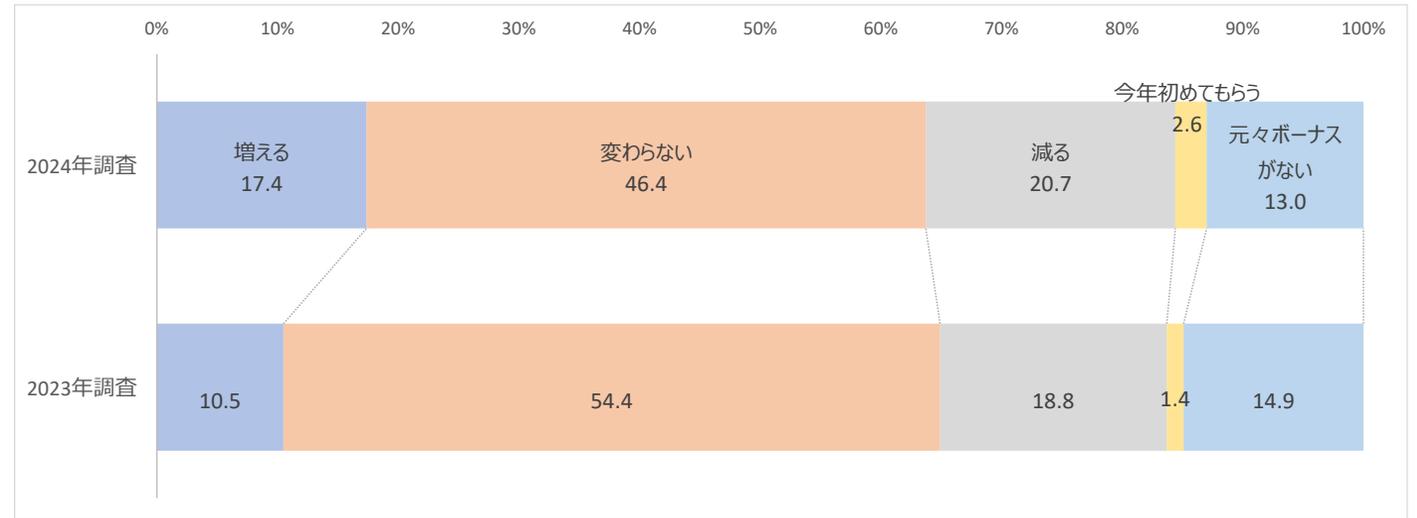
2024年の受取見込額の前年比増減をみると、「変わらない」が46.4%（前年比△8.0㊦）と約半数になっている。「減る」は20.7%（同+1.9㊦）、「増える」は17.4%（同+6.9㊦）となった。昨年調査と比較すると、「変わらない」が減り、「増える」と「減る」が増加している。ただ「増える」と回答した割合は2割弱に留まっており、全体的な支給環境の改善には至っていない（図表3）。

B. 男女別

男女別にみると、男女ともに「変わらない」が半数程度となった。「増える」は男性が女性を10.6㊦上回った。

年代別にみると、「増える」の回答は男性40歳代以下と女性の29歳以下の世代が多い。「減る」の回答は男性60歳以上、女性50歳代が多く、受取額が増加するのは、比較的若い世代が中心とみられる（図表4）。

図表3 ボーナス受取見込額



図表4 ボーナス受取見込額（男女・女性別）

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 増える | 32.4 | 20.5 | 35.9 | 17.5 | 7.5 | 22.6 | 20.8 | 16.3 | 5.0 | 4.3 | 14.3 | 12.0 | 17.4 |
| 変わらない | 43.2 | 48.7 | 46.2 | 52.5 | 55.0 | 49.2 | 41.7 | 51.2 | 47.5 | 39.1 | 28.6 | 43.5 | 46.4 |
| 減る | 10.8 | 17.9 | 5.1 | 15.0 | 25.0 | 14.9 | 20.8 | 23.3 | 15.0 | 43.5 | 35.7 | 26.7 | 20.7 |
| 今年初めてもらう | 2.7 | 0.0 | 0.0 | 2.5 | 0.0 | 1.0 | 6.2 | 4.7 | 5.0 | 2.2 | 0.0 | 4.2 | 2.6 |
| 元々ボーナスがない | 10.8 | 12.8 | 12.8 | 12.5 | 12.5 | 12.3 | 10.4 | 4.7 | 27.5 | 10.9 | 21.4 | 13.6 | 13.0 |
| 合計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

(2) 金額階層別の受取見込額

A.全体

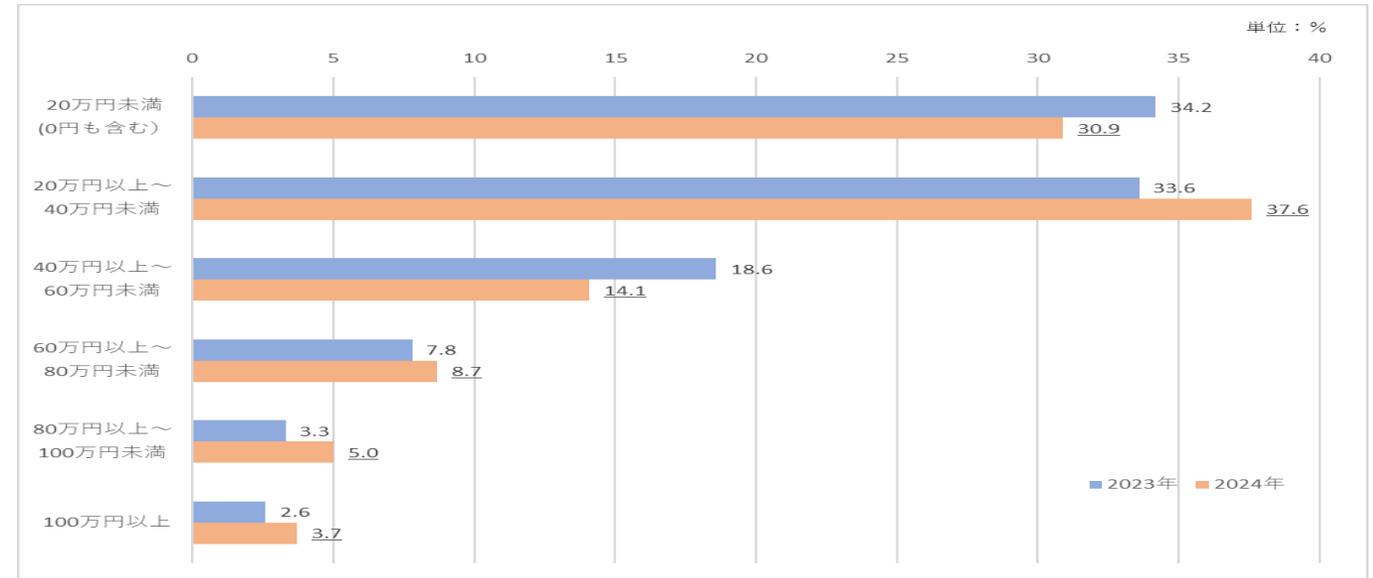
金額階層別の受取見込額をみると、「20万円以上40万円未満」が37.6%（前年比+4.0㊦）で最も多く、次いで「20万円未満」が30.9%（同△3.3㊦）、「40万円以上～60万円未満」が14.1%（同△4.5㊦）の順となった。

前年の割合と比較すると、「20万円未満（0円も含む）」と「40万円以上～60万円未満」が減少し、他の階層では増加した（図表5）。

B.男女別

男女別にみると、40万円未満の受取見込額の割合は、男性が約6割、女性が約8割に及んだ（図表6）。

図表5 金額階層別のボーナス受取見込額



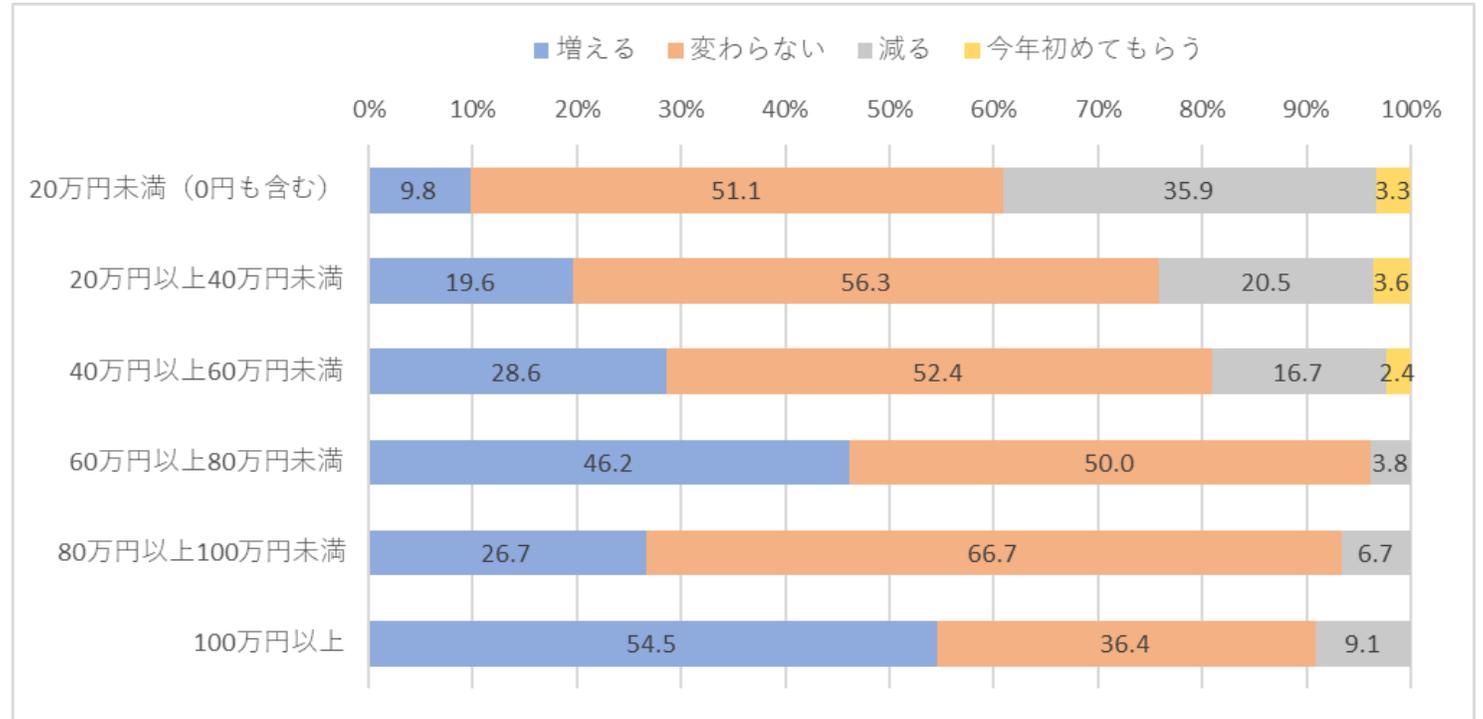
図表6 金額階層別のボーナス受取見込額（男女・年代別）

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|----------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 20万円未満 (0円も含む) | 13.3 | 20.0 | 38.2 | 13.3 | 32.4 | 24.1 | 34.2 | 34.2 | 30.8 | 55.9 | 30.0 | 38.6 | 30.9 |
| 20万円以上～40万円未満 | 66.7 | 30.0 | 26.5 | 33.3 | 20.6 | 34.8 | 54.3 | 37.1 | 42.3 | 29.4 | 40.0 | 40.7 | 37.6 |
| 40万円以上～60万円未満 | 6.7 | 23.3 | 11.8 | 13.3 | 14.7 | 13.9 | 11.4 | 17.1 | 19.2 | 8.8 | 20.0 | 14.3 | 14.1 |
| 60万円以上～80万円未満 | 13.3 | 23.3 | 5.9 | 6.7 | 14.7 | 12.7 | 0.0 | 5.7 | 3.8 | 5.9 | 10.0 | 4.3 | 8.7 |
| 80万円以上～100万円未満 | 0.0 | 0.0 | 11.8 | 13.3 | 14.7 | 8.2 | 0.0 | 2.9 | 3.8 | 0.0 | 0.0 | 1.4 | 5.0 |
| 100万円以上 | 0.0 | 3.3 | 5.9 | 20.0 | 2.9 | 6.3 | 0.0 | 2.9 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.7 | 3.7 |
| 合計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

C. ボーナス受取金額の金額階層別増減割合

ボーナス受取見込額の金額階層別の前年比を比較すると、40万未満]階層では、「減る」の割合が「増える」を上回った。一方、40万円以上の階層では、「増える」が「減る」を上回っており、ボーナス支給額の差が広がっている（図表7）。

図表7 ボーナス受取金額の階層別増減割合



(3) ボーナスの使い道について (複数回答)

A. 全体

ボーナスの使い道の上位3位をみると、「貯蓄」が65.8% (前年比△2.5㊦)、「買物」が29.8% (同△0.7㊦)、「生活費の補填」が24.7% (同△4.4㊦) となり、前年同様、「貯蓄」が7割近くとなった。

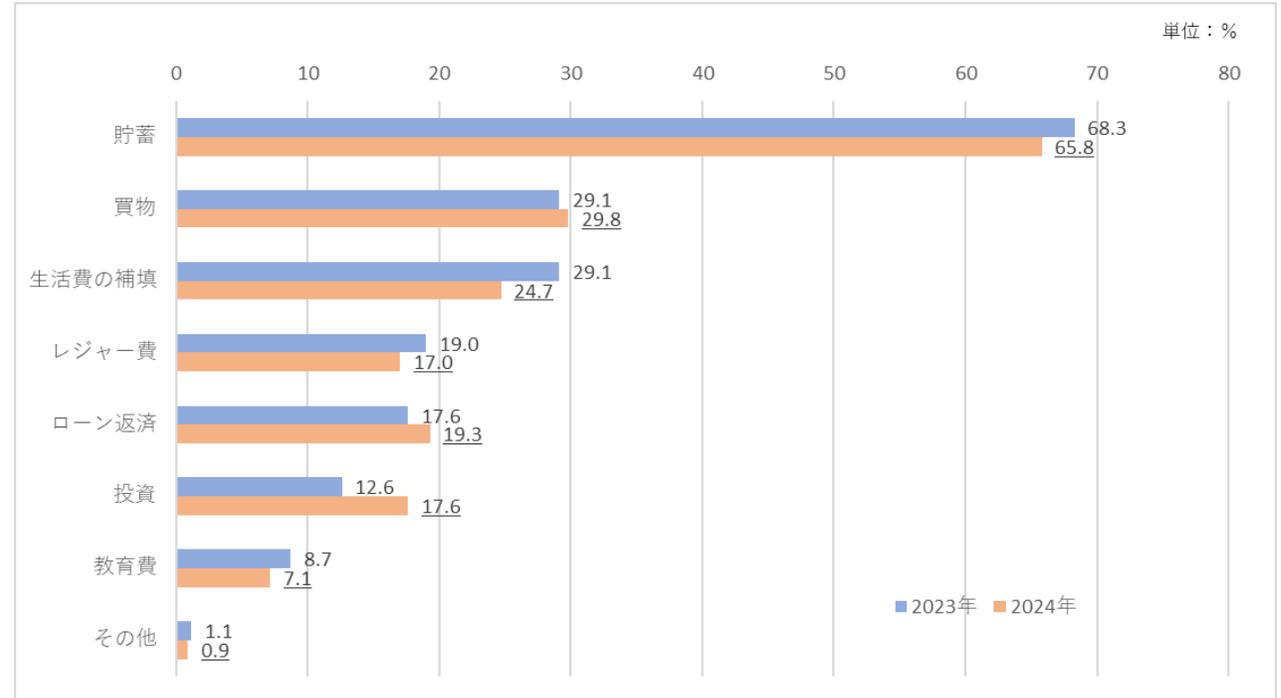
前年と比較すると、投資の割合も増えており、貯蓄と含め、将来への備えの準備をする割合が増えている (図表8)。

B. 男女別・年代別

男女別にみると、男女とも第1位は「貯蓄」で、男性は「30歳代」、女性は「29歳以下」の世代で7割を超えている。「投資」も男女とも「30歳代」の割合は2割を超えており、若い年齢階層では、将来に備えた資金作りのために、「貯蓄」「投資」を行っているものと思われる。

一方、男性の「50歳代」「60歳代」では、「生活費の補填」が40%と高く、毎月の赤字分をボーナスで補っている人が多くみられる (図9)。

図表8 ボーナスの使い道について



図表9 ボーナスの使い道について (男女・年代別)

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|--------|-------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 貯蓄 | 66.7 | 76.5 | 55.9 | 68.6 | 65.7 | 66.7 | 74.4 | 63.4 | 69.0 | 53.7 | 63.6 | 64.8 | 65.8 |
| 買物 | 36.4 | 38.2 | 26.5 | 31.4 | 28.6 | 29.8 | 34.9 | 26.8 | 17.2 | 26.8 | 27.3 | 27.3 | 29.8 |
| 生活費の補填 | 9.1 | 20.6 | 20.6 | 40.0 | 40.0 | 26.3 | 14.0 | 24.4 | 17.2 | 39.0 | 9.1 | 23.0 | 24.7 |
| レジャー費 | 12.1 | 26.5 | 17.6 | 20.0 | 11.4 | 17.5 | 7.0 | 17.1 | 20.7 | 17.1 | 36.4 | 16.4 | 17.0 |
| ローン返済 | 24.2 | 26.5 | 23.5 | 25.7 | 5.7 | 21.1 | 14.0 | 17.1 | 24.1 | 22.0 | 0.0 | 17.6 | 19.3 |
| 投資 | 18.2 | 29.4 | 35.3 | 17.1 | 8.6 | 21.6 | 11.6 | 24.4 | 10.3 | 9.8 | 0.0 | 13.3 | 17.6 |
| 教育費 | 6.1 | 5.9 | 17.6 | 8.6 | 8.6 | 9.4 | 0.0 | 2.4 | 10.3 | 9.8 | 0.0 | 4.8 | 7.1 |
| その他 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 2.3 | 2.4 | 0.0 | 2.4 | 0.0 | 1.8 | 0.9 |

※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

(4) 消費動向について

A. ボーナスの消費支出予定項目（複数回答）

(a) 全体

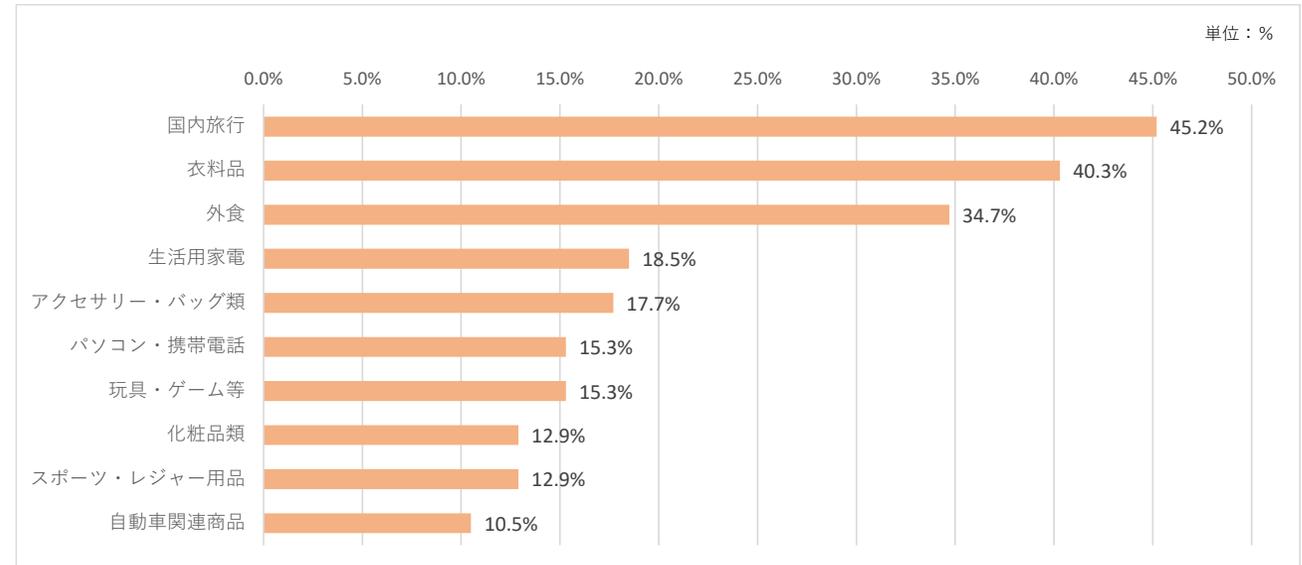
ボーナスの消費支出予定項目の上位をみると、「国内旅行」の45.2%が最も多く、次いで「衣料品」が40.3%、「外食」が34.7%の順となった（図表10）。

(b) 男女別・年代別

男女別にみると、男性では「国内旅行」が40.6%で最も多く、次いで「衣料品」が35.9%、「外食」が34.7%の順となり、「国内旅行」は「60歳以上」、「衣料品」は「50歳代」、「外食」は「29歳以下」で最も割合が高かった。

女性も「国内旅行」が50.0%で最も高く、次いで「衣料品」が45.0%、「外食」が40.0%の順となり、「国内旅行」は「30歳代」、「衣料品」と「外食」は「40歳代」で最も割合が高かった（図表11）。

図表10 消費予定項目（複数回答）



図表11 消費予定項目（複数回答）

| | 男 性 | | | | | | 女 性 | | | | | | 全体 |
|-------------|-------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 国内旅行 | 30.8 | 31.2 | 45.5 | 38.5 | 63.6 | 40.6 | 37.5 | 60.0 | 50.0 | 53.3 | 50.0 | 50.0 | 45.2 |
| 衣料品 | 46.2 | 43.8 | 27.3 | 53.8 | 0.0 | 35.9 | 37.5 | 33.3 | 62.5 | 60.0 | 33.3 | 45.0 | 40.3 |
| 外食 | 46.2 | 31.2 | 27.3 | 30.8 | 9.1 | 34.7 | 18.8 | 46.7 | 62.5 | 53.3 | 16.7 | 40.0 | 34.7 |
| 生活家電 | 15.4 | 12.5 | 0.0 | 69.2 | 45.5 | 28.1 | 0.0 | 6.7 | 12.5 | 13.3 | 16.7 | 8.3 | 18.5 |
| アクセサリ・バッグ類 | 30.8 | 12.5 | 0.0 | 0.0 | 18.2 | 12.5 | 25.0 | 20.0 | 12.5 | 33.3 | 16.7 | 23.3 | 17.7 |
| パソコン・携帯電話 | 7.7 | 25.0 | 36.4 | 46.2 | 9.1 | 25.0 | 6.2 | 0.0 | 0.0 | 13.3 | 0.0 | 5.0 | 15.3 |
| 玩具・ゲーム等 | 23.1 | 50.0 | 36.4 | 0.0 | 0.0 | 23.4 | 18.8 | 6.7 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 6.7 | 15.3 |
| 化粧品類 | 15.4 | 6.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 4.7 | 31.2 | 20.0 | 25.0 | 20.0 | 0.0 | 21.7 | 12.9 |
| スポーツ・レジャー用品 | 15.4 | 37.5 | 36.4 | 23.1 | 9.1 | 25.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 12.9 |
| 自動車関連商品 | 23.1 | 6.2 | 18.2 | 23.1 | 18.2 | 17.2 | 0.0 | 0.0 | 12.5 | 6.7 | 0.0 | 3.3 | 10.5 |

※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

(5) 貯蓄・投資について

A. 貯蓄・投資の目的（複数回答）

(a) 全体

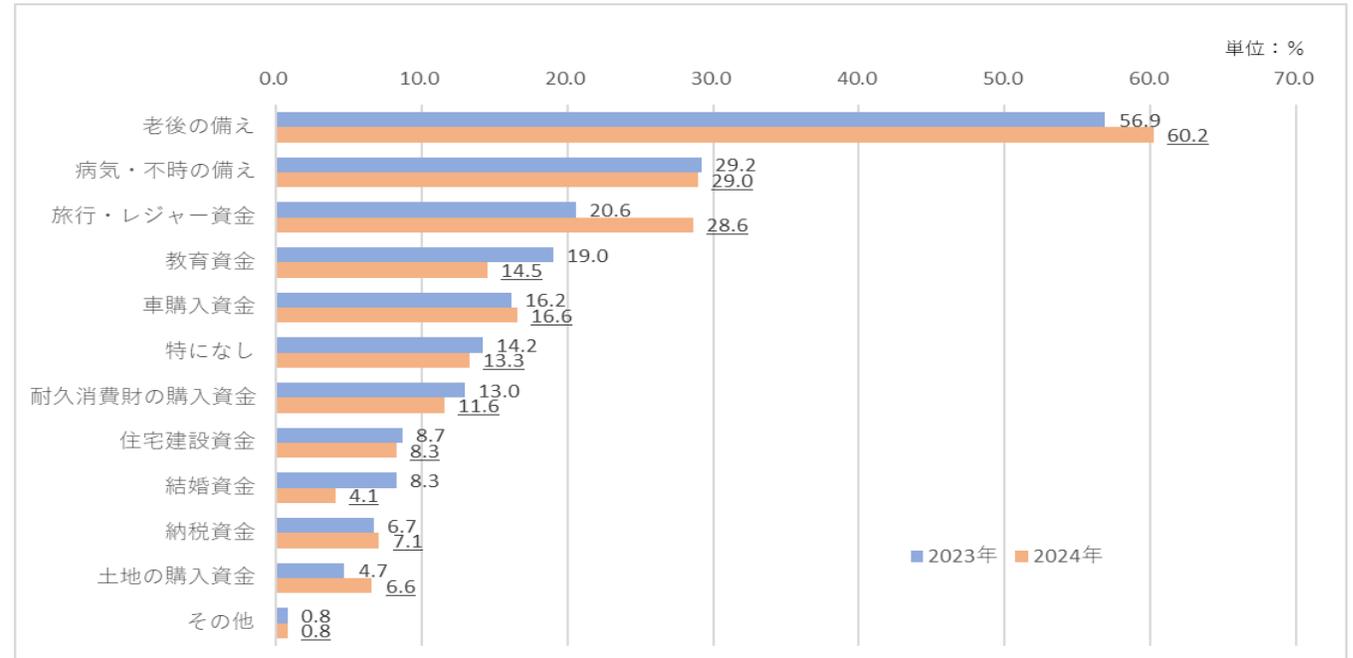
「貯蓄」と「投資」の目的をみると、「老後の備え」が60.2%（前年比+3.3㊦）と最も割合が高く、次いで「病気・不時の備え」が29.0%（同△0.2㊦）、「旅行・レジャー資金」が28.6%（同+8.0㊦）となった。「老後の備え」「病気・不時の備え」は例年第1～2位を占めており、将来やいざという時への備えという側面が強い（図表12）。

(b) 男女別・年代別

男女別にみると、男性では「老後の備え」が62.7%で最も高く、次いで「病気・不時の備え」が31.0%、「旅行・レジャー資金」が26.2%となった。「老後の備え」「病気・不時の備え」は「60歳以上」が高く、「旅行・レジャー資金」「車購入資金」は「30歳代」で最も高い割合となった。

女性では「老後の備え」が57.4%で最も高く、次いで、「旅行・レジャー資金」が31.3%となった。「老後の備え」は男性同様に「60歳以上」が高く、「60歳以上」は「旅行・レジャー資金」も高かった（図表13）。

図表12 貯蓄・投資の目的（複数回答）



図表13 貯蓄・投資の目的（複数回答）

| | 男 | | | | | | 女 | | | | | | 全体 |
|------------|-------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 老後の備え | 32.0 | 50.0 | 70.8 | 72.0 | 91.7 | 62.7 | 44.1 | 64.5 | 35.0 | 78.3 | 85.7 | 57.4 | 60.2 |
| 病気・不時の備え | 20.0 | 35.7 | 16.7 | 36.0 | 45.8 | 31.0 | 26.5 | 32.3 | 15.0 | 34.8 | 14.3 | 27.0 | 29.0 |
| 旅行・レジャー資金 | 20.0 | 50.0 | 16.7 | 12.0 | 29.2 | 26.2 | 17.6 | 35.5 | 15.0 | 43.5 | 85.7 | 31.3 | 28.6 |
| 車購入資金 | 24.0 | 25.0 | 16.7 | 24.0 | 16.7 | 21.4 | 2.9 | 22.6 | 5.0 | 17.4 | 0.0 | 11.3 | 16.6 |
| 教育資金 | 12.0 | 21.4 | 4.2 | 8.0 | 0.0 | 9.5 | 11.8 | 32.3 | 25.0 | 17.4 | 0.0 | 20.0 | 14.5 |
| 特になし | 12.0 | 17.9 | 16.7 | 16.0 | 4.2 | 13.5 | 11.8 | 16.1 | 30.0 | 0.0 | 0.0 | 13.0 | 13.3 |
| 耐久消費財の購入資金 | 20.0 | 7.1 | 4.2 | 24.0 | 8.3 | 12.7 | 14.7 | 12.9 | 5.0 | 8.7 | 0.0 | 10.4 | 11.6 |
| 住宅建設資金 | 16.0 | 17.9 | 16.7 | 0.0 | 0.0 | 10.3 | 8.8 | 6.5 | 10.0 | 0.0 | 0.0 | 6.1 | 8.3 |
| 納税資金 | 12.0 | 3.6 | 8.3 | 8.0 | 0.0 | 6.3 | 5.9 | 12.9 | 5.0 | 8.7 | 0.0 | 7.8 | 7.1 |
| 土地の購入資金 | 24.0 | 10.7 | 4.2 | 0.0 | 0.0 | 7.9 | 5.9 | 9.7 | 5.0 | 0.0 | 0.0 | 5.2 | 6.6 |
| 結婚資金 | 16.0 | 7.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 4.8 | 5.9 | 6.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 3.5 | 4.1 |
| その他 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1.7 | 0.8 |

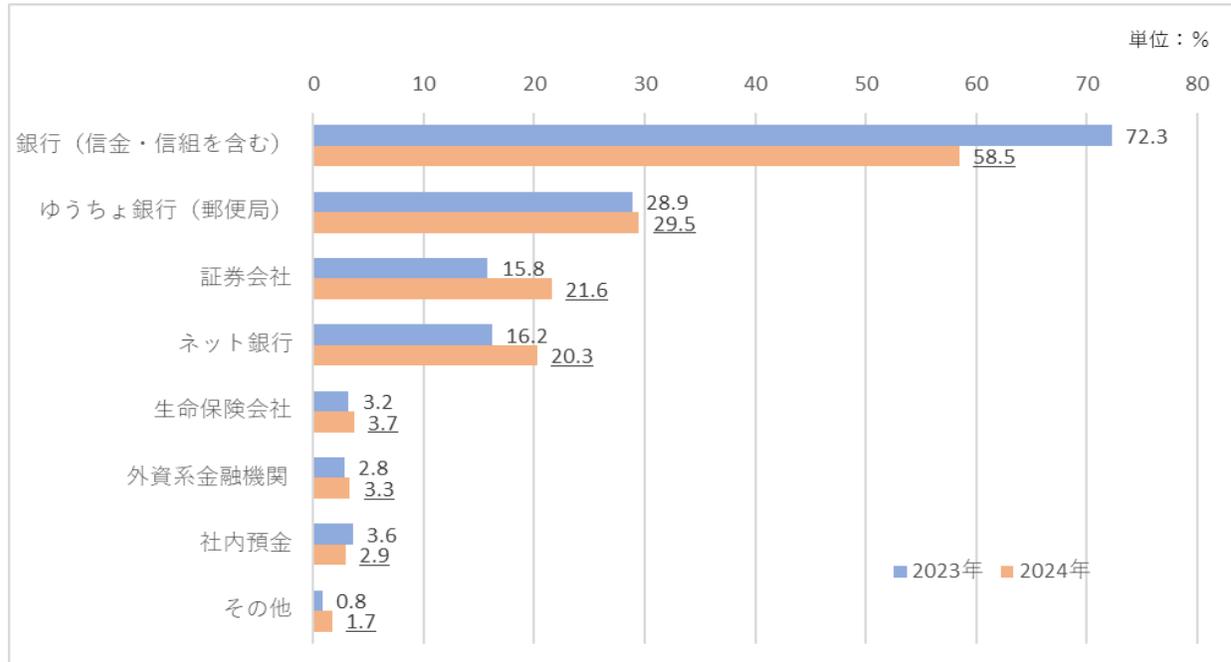
※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

B. 預け先・預け入れ商品（複数回答）

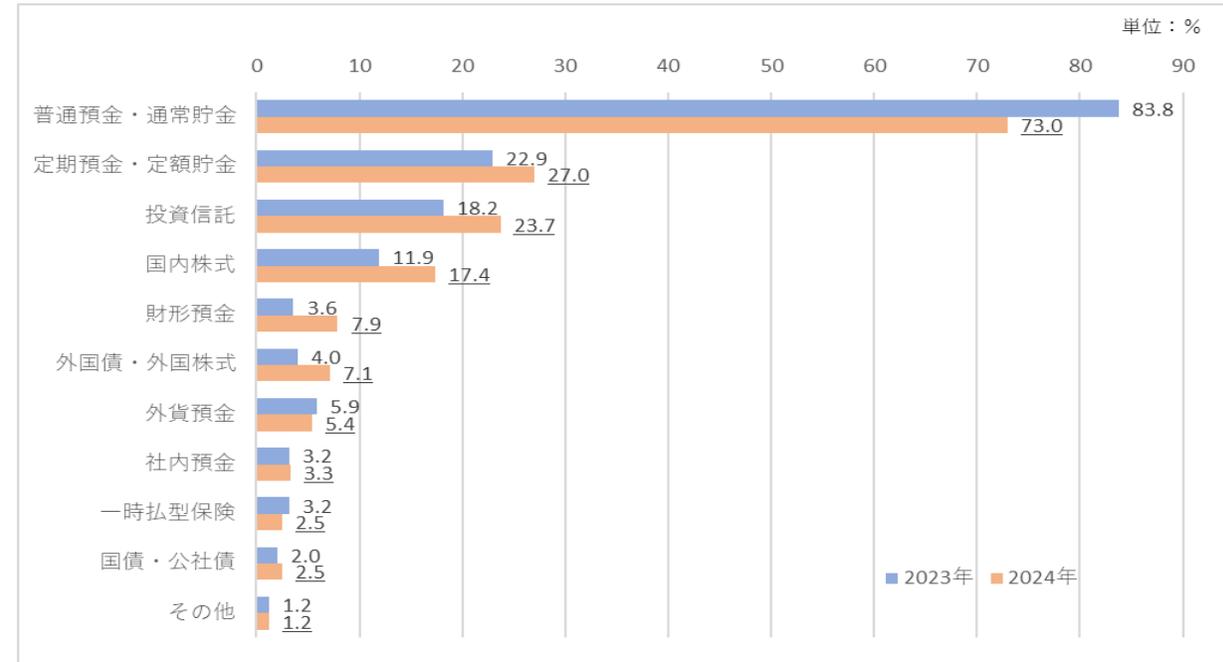
貯蓄・投資利用機関は、「銀行（信金・信組を含む）」が58.5%（前年比△13.8㊦）と最も多く、次いで「ゆうちょ銀行（郵便局）」が29.5%（同+0.6㊦）、「証券会社」が21.6%（同+5.8㊦）、「ネット銀行」20.3%（同+4.1㊦）となった。前年と比較すると、「銀行（信金・信組を含む）」の割合が低下し、「証券会社」「ネット銀行」の割合が上昇した（図表14）。

預け入れ商品は、「普通預金・通常貯金」が73.0%（同△10.8㊦）で最も高く、次いで「定期預金・定額貯金」が27.0%（同+4.1㊦）、「投資信託」が23.7%（同+5.5㊦）となった。前年と比較すると、「普通預金・通常預金」に預ける割合が低下し、「投資信託」や「国内株式」に預ける割合も上昇していることから、収益性も考慮して資金運用する割合も高くなっている（図表15）。

図表14 貯蓄・投資利用機関（複数回答）



図表15 預け入れ商品（複数回答）



(6) ローン全体について

A. 全体

ローン返済の種類をみると、「住宅ローン」が49.2%（前年比+3.2㊦）で最も高く、次いで「自動車ローン」が38.5%（同△10.7㊦）、「クレジット会社・消費者金融会社のローン」が24.6%（同+7.1㊦）となった。

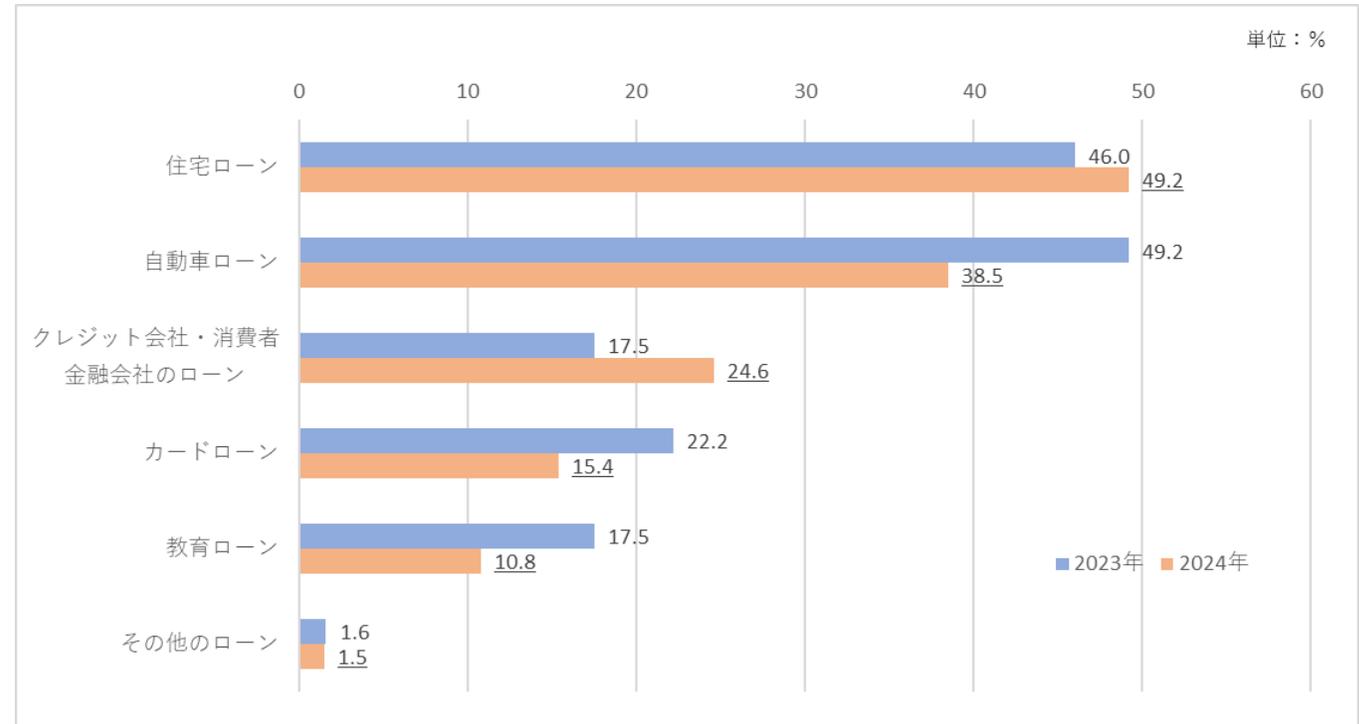
前年と比べると、「住宅ローン」が増加し、「クレジット会社・消費者金融」が「カードローン」の割合を上回った（図表16）。

B. 男女別・年代別

男女別にみると、男性では「住宅ローン」が52.8%で最も多く、次いで「自動車ローン」が44.4%、女性も「住宅ローン」が44.8%で最も高く、次いで「自動車ローン」が31.0%となった。

男性、女性とも、「29歳以下」で「クレジット会社・消費者金融会社のローン」「カードローン」の割合が最も高かった（図表17）。

図表16 ローン返済（複数回答）



図表17 ローン返済（複数回答）

| | 男 性 | | | | | | 女 性 | | | | | | 全体 |
|---------------------|-------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 住 宅 ロ ー ン | 37.5 | 66.7 | 37.5 | 55.6 | 100.0 | 52.8 | 16.7 | 28.6 | 71.4 | 55.6 | 0.0 | 44.8 | 49.2 |
| 自 動 車 ロ ー ン | 37.5 | 33.3 | 62.5 | 44.4 | 50.0 | 44.4 | 16.7 | 28.6 | 28.6 | 44.4 | 0.0 | 31.0 | 38.5 |
| クレジット会社・消費者金融会社のローン | 75.0 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 25.0 | 66.7 | 28.6 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | 24.1 | 24.6 |
| カ ー ド ロ ー ン | 25.0 | 11.1 | 25.0 | 11.1 | 0.0 | 16.7 | 33.3 | 14.3 | 0.0 | 11.1 | 0.0 | 13.8 | 15.4 |
| 教 育 ロ ー ン | 12.5 | 11.1 | 0.0 | 22.2 | 0.0 | 11.1 | 16.7 | 0.0 | 0.0 | 22.2 | 0.0 | 10.3 | 10.8 |
| そ の 他 ロ ー ン | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 3.4 | 1.5 |

※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

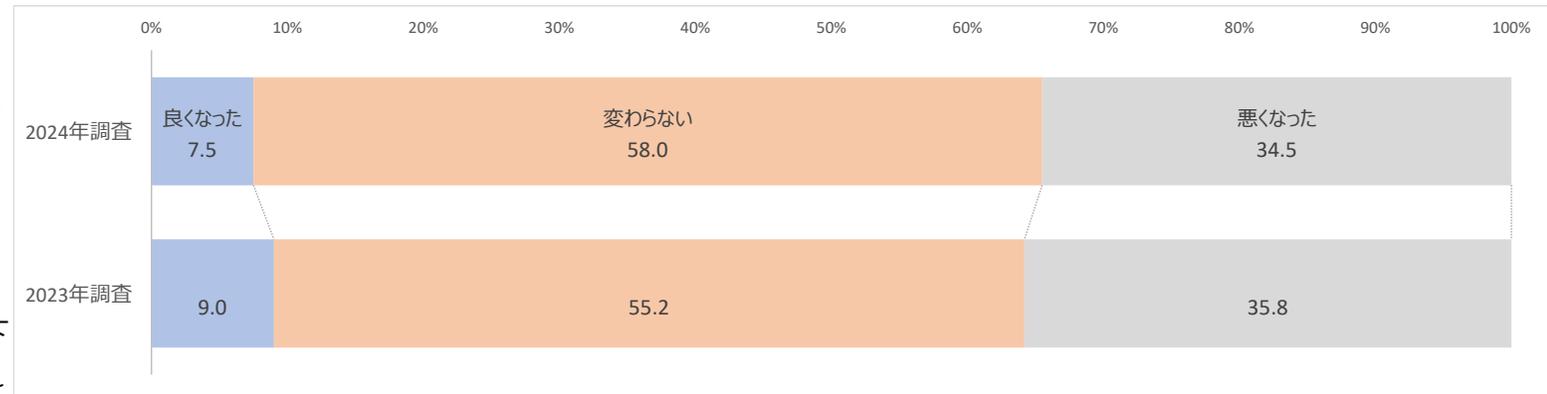
II 暮らし向きアンケート調査結果について

1. 現在の暮らし向き

1年前と比べた現在の暮らし向きをみると、「変わらない」が58.0%（前年比+2.8㊦）で最も高く、次いで「悪くなった」が34.5%（同△1.3㊦）、「良くなった」が7.5%（同△1.5㊦）となった。前年よりも「良くなった」「悪くなった」の割合が低下し、「変わらない」が上昇している（図表18）。

男女別にみると、男性の「良くなった」の割合は「29歳以下」が、「悪くなった」は「60歳以上」が最も多かった。女性は「良くなった」が29歳以下が、「悪くなった」は「50歳代」が最も高かった。若い世代は「良くなった」と感じている割合が、他の世代に比べて高く、逆に、中高年齢層では「悪くなった」と感じている割合が高くなったことから、年代により感じ方が違っている（図表19）。

図表18 現在の暮らし向き



図表19 現在の暮らし向き（男女・年齢別）

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 良くなった | 21.6 | 10.3 | 12.8 | 2.5 | 0.0 | 9.2 | 10.4 | 9.3 | 5.0 | 0.0 | 0.0 | 5.8 | 7.5 |
| 変わらない | 62.2 | 53.8 | 53.8 | 57.5 | 57.5 | 56.9 | 66.7 | 53.5 | 65.0 | 52.2 | 57.1 | 59.2 | 58.0 |
| 悪くなった | 16.2 | 35.9 | 33.3 | 40.0 | 42.5 | 33.8 | 22.9 | 37.2 | 30.0 | 47.8 | 42.9 | 35.1 | 34.5 |
| 全体 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

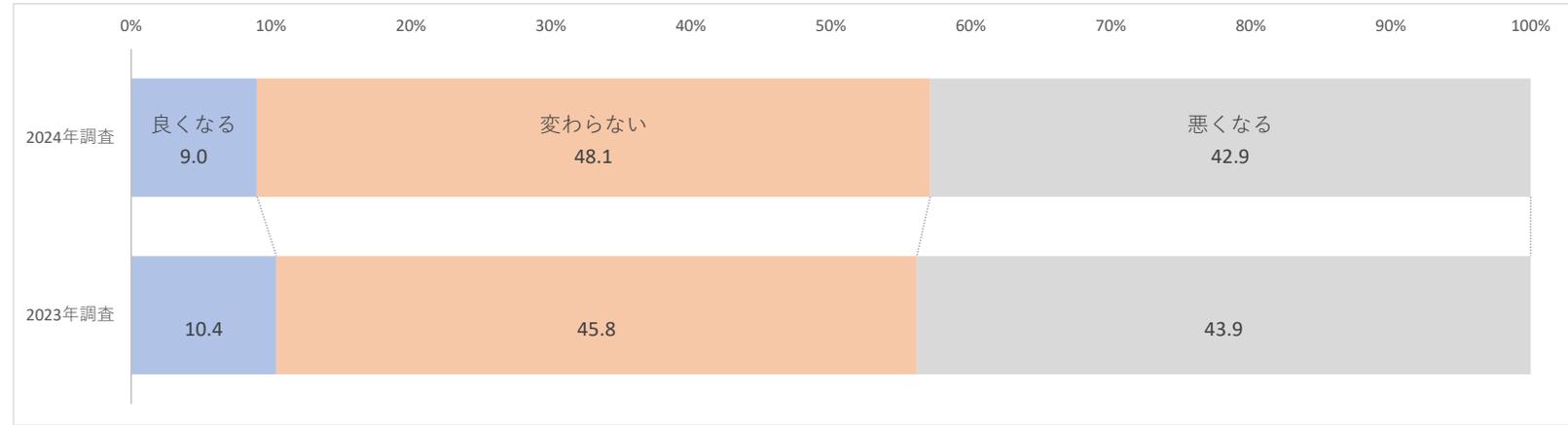
※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

2. 今後1年間の暮らし向き

今後1年間の暮らし向きをみると、「変わらない」が48.1%（前年比+2.3㊦）と最も高く、次いで「悪くなる」が42.9%（同△1.0㊦）、「良くなる」が9.0%（同△1.4㊦）と、今後1年間の暮らし向きは、約9割が現状もしくは悪くなると想定している（図表20）。

男女別にみると、男性は「良くなる」の割合が「40歳代」で最も高く、「変わらない」は「29歳以下」が高い。「悪くなる」は50歳代以上の階層で50%を超えており、中高年齢層で先行きに対する不透明感が強い。一方、女性で「良くなる」は「29歳以下」が最も高い。男性と同様に女性も50歳以上の階層で「悪くなる」が50%を超えている（図表21）。

図表20 今後1年間の暮らし向き



図表21 今後1年間の暮らし向き（男女・年齢別）

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 良くなる | 19.4 | 12.9 | 22.9 | 0.0 | 0.0 | 10.3 | 17.8 | 11.1 | 3.0 | 0.0 | 0.0 | 7.7 | 9.0 |
| 変わらない | 61.3 | 38.7 | 45.7 | 48.6 | 32.5 | 44.8 | 55.6 | 55.6 | 63.6 | 34.9 | 50.0 | 51.5 | 48.1 |
| 悪くなる | 19.4 | 48.4 | 31.4 | 51.4 | 67.5 | 42.9 | 26.7 | 33.3 | 33.3 | 65.0 | 50.0 | 40.8 | 42.9 |
| 全体 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

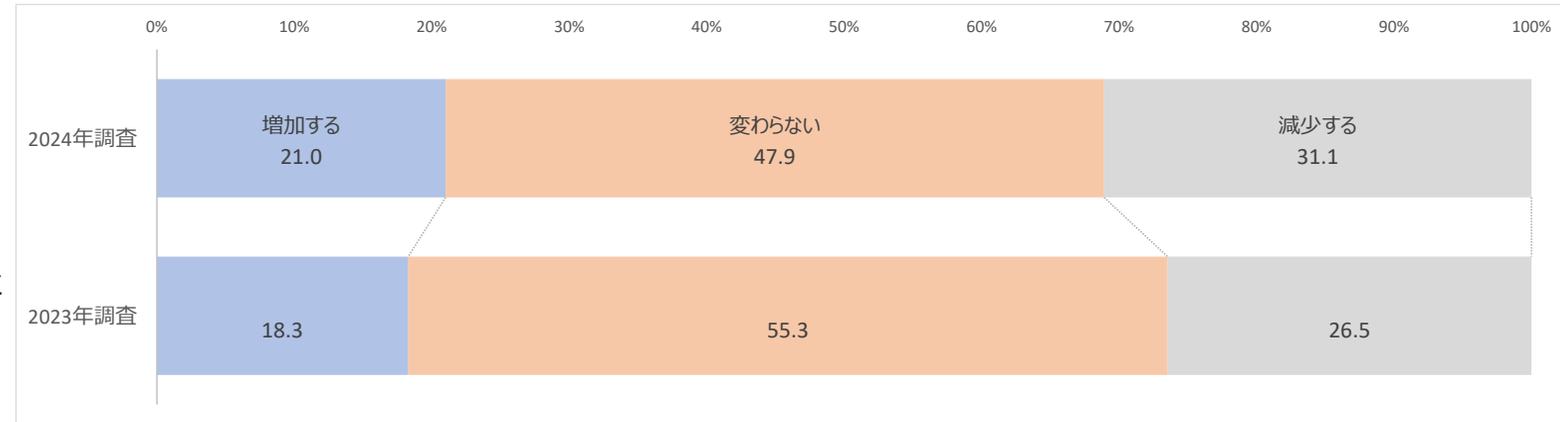
※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

3. 今後1年間の収入見込について

今後1年間の収入見込は、「変わらない」が47.9%（前年比△7.4㊦）と最も高く、次いで「減少する」が31.1%（同+4.6㊦）、「増加する」が21.0%（同+2.7㊦）となった。前年と比べた割合は、「増加する」「減少する」が共に増加しており、二極化がみられる（図表22）。

男女別にみると、男性は「増加する」が、40歳代以下で3割前後となっている。女性は「増加する」が30歳代以下の世代が2割程度となっており、若い世代ほど、今後収入が増加すると見込んでいる（図表23）。

図表22 今後1年間の収入見込み



図表23 今後1年間の収入見込み（男女・年齢別）

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 増加する | 33.3 | 28.6 | 37.8 | 10.5 | 5.1 | 10.3 | 25.6 | 23.7 | 11.1 | 19.0 | 7.7 | 7.7 | 21.0 |
| 変わらない | 44.4 | 40.0 | 43.2 | 60.5 | 46.2 | 44.8 | 44.2 | 52.6 | 61.1 | 35.7 | 61.5 | 51.5 | 47.9 |
| 減少する | 22.2 | 31.4 | 18.9 | 28.9 | 48.7 | 44.8 | 30.2 | 23.7 | 27.8 | 45.2 | 30.8 | 40.8 | 31.1 |
| 全体 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

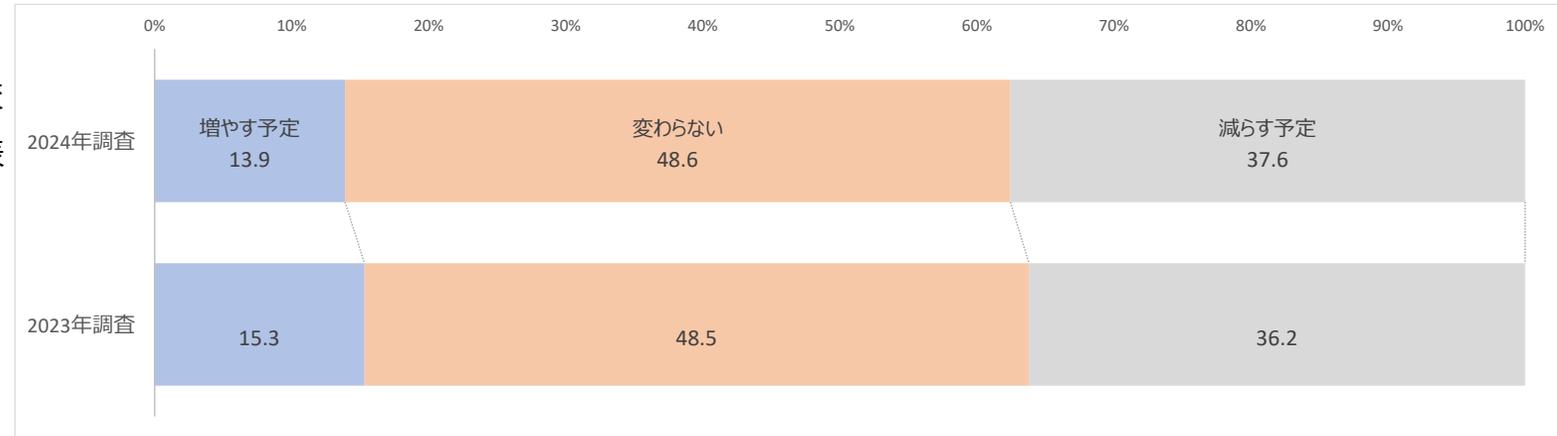
4. 今後1年間の消費支出について

(1) 回答構成比

今後1年間の消費支出をみると、「変わらない」が48.6%（前年比+0.1㊦）と最も高く、次いで「減らす予定」が37.6%（同+1.4㊦）、「増やす予定」が13.9%（同△1.4㊦）となった。前年と比較すると、「増やす予定」が低下し、「減らす予定」が上昇している（図表24）。今後1年間の暮らし向きが変わらないかもしくは悪化する見通しから、総じて消費支出を減らす意向が強まっていると思われる。

男女別にみると、「増やす予定」は男性の「40歳代」「29歳以下」で2割を超えた。「減らす予定」は男性、女性とも60歳以上の世代が5割近くに達し、年代による違いが表れている（図表25）。

図表24 今後1年間の消費支出



図表25 今後1年間の消費支出（男女・年齢別）

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 増やす予定 | 27.3 | 16.7 | 27.8 | 11.1 | 7.7 | 17.8 | 2.4 | 11.1 | 11.8 | 14.6 | 7.7 | 9.6 | 13.9 |
| 変わらない | 54.5 | 50.0 | 47.2 | 38.9 | 41.0 | 46.1 | 64.3 | 61.1 | 50.0 | 31.7 | 46.2 | 51.2 | 48.6 |
| 減らす予定 | 18.2 | 33.3 | 25.0 | 50.0 | 51.3 | 36.1 | 33.3 | 27.8 | 38.2 | 53.7 | 46.2 | 39.2 | 37.6 |
| 全体 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

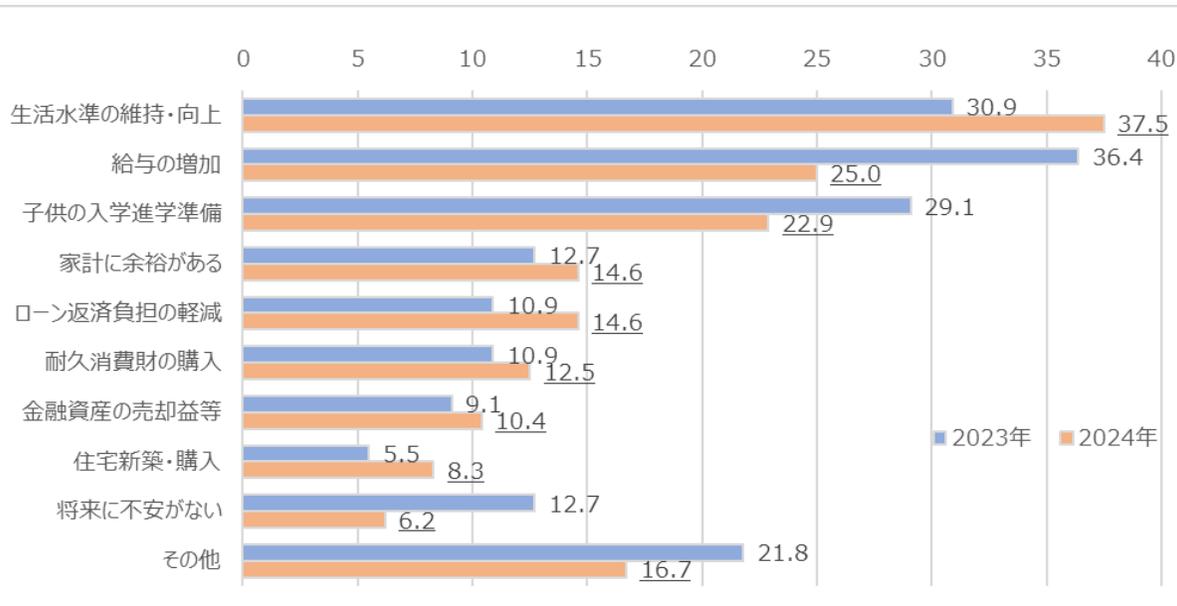
(2) 消費支出を増やす理由 (複数回答)

消費支出を「増やす」理由をみると、「生活水準の維持・向上」が37.5% (前年比+6.6%) で最も高く、次いで「給与の増加」が25.0% (同△11.4%)、「子供の入学進学準備」が22.9% (同△6.2%) などとなった。前年と比べると、「給与の増加」が低下し、「生活水準の維持・向上」が上昇しており、背景には、物価水準の高騰などにより支出を増やさざるを得ない状況もあると思われる (図表26)。

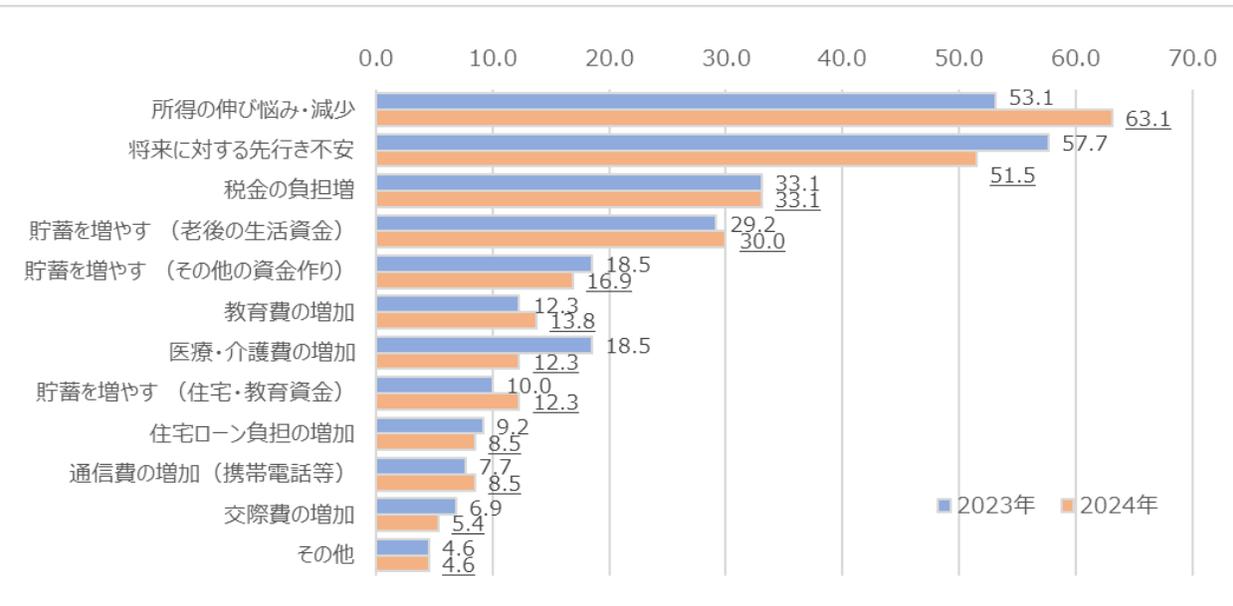
(3) 消費支出を減らす理由 (複数回答)

消費支出を「減らす予定」と回答した理由をみると、「所得の伸び悩み・減少」が63.1% (前年比+10.0%) で最も高く、次いで「将来に対する先行き不安」が51.5% (同△6.2%)、「税金の負担増」(同±0.0%) などとなり、所得面や先行きに対する不安感、税金や医療費などの増加から消費支出を抑え、貯蓄に回しているものとみられる (図表27)。

図表26 消費支出を増やす理由 (複数回答)



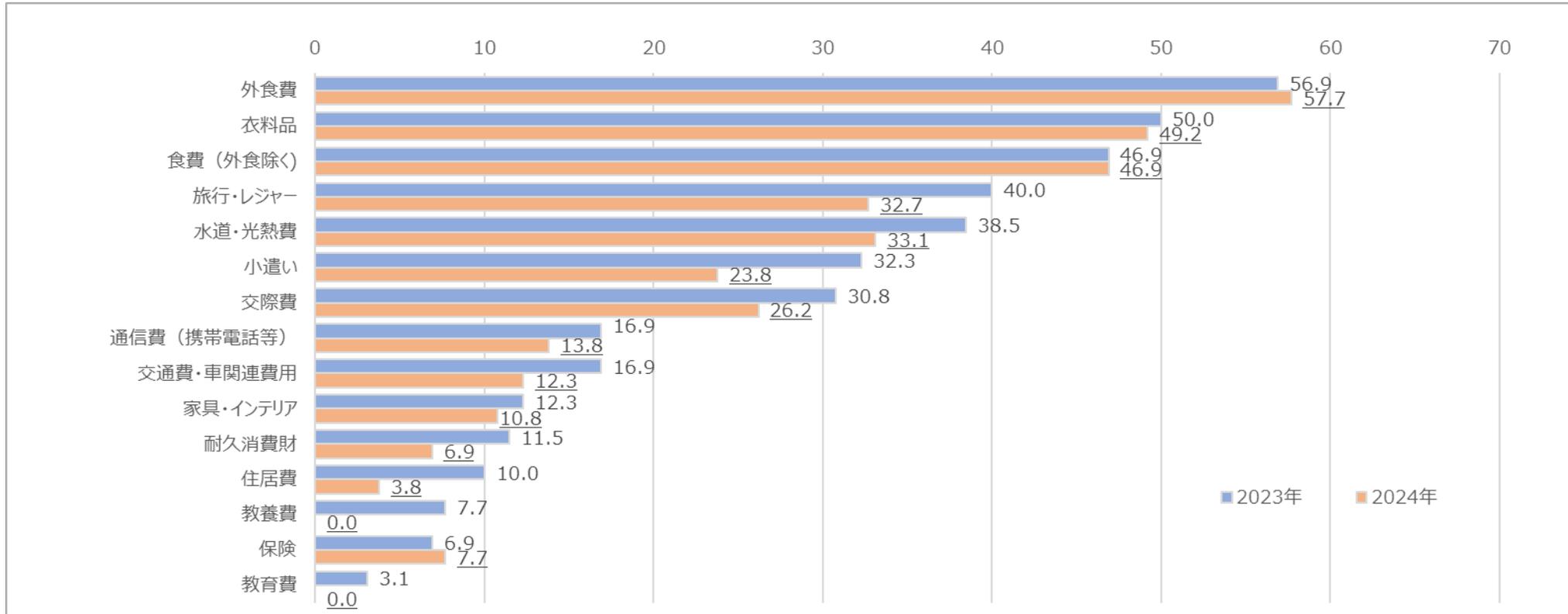
図表27 消費支出を減らす理由 (複数回答)



(4) 消費支出を減らすために抑える項目 (複数回答)

上位3位までは前年と同じ順位であり、「外食費」が57.7% (前年比+0.8㊦)、「衣料品」が49.2% (同△0.8㊦)、「食費」が46.9% (同±0.0㊦) となっている。物価上昇による実質賃金が減少する中、節約出来るところから減らしていこうという傾向がうかがえる (図表28)。

図表28 消費支出を減らすために抑える項目 (複数回答)



Ⅲ 賃上げと物価高による家計への影響に関する調査結果について

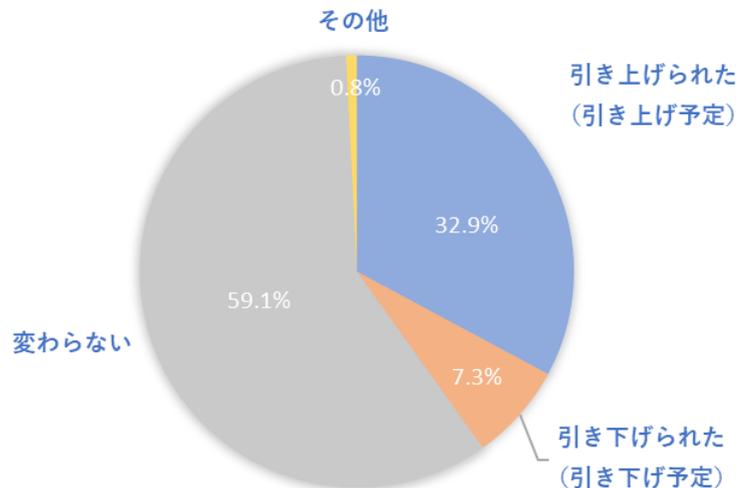
今回調査では、賃上げ状況と物価上昇が県内の家計に及ぼしている影響や家計での取り組みについてアンケート結果をまとめた。

1. 賃上げの実施状況

今春の賃上げ実施状況は、「変わらない」が59.1%と最も高く、次いで「引き上げられた（引き上げ予定）」が32.9%、「引き下げられた（引き下げ予定）」が7.3%の順となった。「引き上げられた（引き上げ予定）」は、3割程度に留まっており、6割は賃金が変わっていない（図表29）。

男女別にみると、男性の40歳代以下は、半数程度が「引き上げられた（引き上げ予定）」となっている。一方、「50歳代」の7割、「60歳以上」の6割は賃金は「変わらない」との回答をしており、若い世代ほど、賃金が引き上げられている。女性は、「引き上げられた（引き上げ予定）」は各世代で3割程度となり、「変わらない」が各世代で6割程度となった（図表30）。

図表29 賃上げの実施状況



図表30 賃上げの実施状況（男女・年齢別）

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 引き上げられた (引き上げ予定) | 51.4 | 48.7 | 46.2 | 20.0 | 17.5 | 36.4 | 31.2 | 32.6 | 25.0 | 28.3 | 28.6 | 29.3 | 32.9 |
| 引き下げられた (引き下げ予定) | 5.4 | 7.7 | 2.6 | 7.5 | 17.5 | 8.2 | 2.1 | 11.6 | 7.5 | 4.3 | 7.1 | 6.3 | 7.3 |
| 変わらない | 43.2 | 43.6 | 51.3 | 72.5 | 65.0 | 55.4 | 64.6 | 55.8 | 67.5 | 63.0 | 64.3 | 62.8 | 59.1 |
| その他 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 2.1 | 0.0 | 0.0 | 4.3 | 0.0 | 1.6 | 0.8 |
| 全体 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

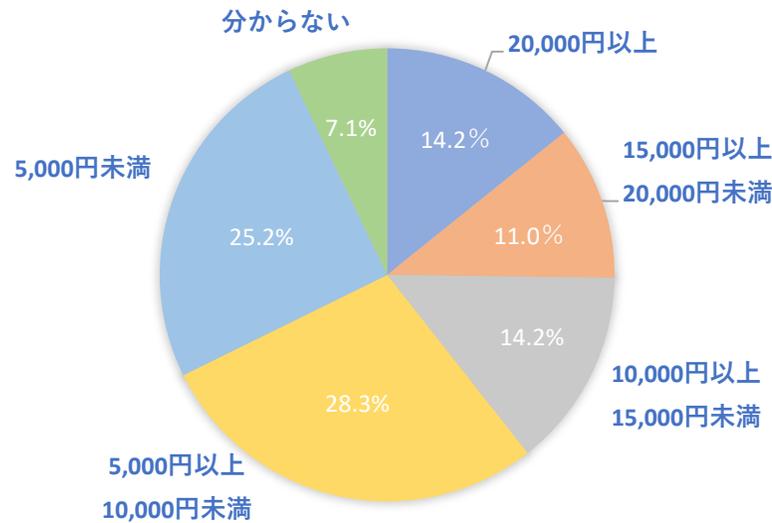
※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

2. 賃上げの実施額

賃上げの実施額は、「5,000円以上10,000円未満」が28.3%と最も多く、次いで「5,000円未満」が25.2%、「10,000円以上15,000円未満」「20,000円以上」14.2%の順となっている。10,000円未満の賃上げ額が半数を占めている（図表31）。

男女別にみると、「20,000円以上増加」は男性、女性とも「29歳以下」の世代が最も多い。男性は、「5,000円以上10,000円未満増加」が4割近くと多く、女性は「5,000円未満増加」が4割超と最も多くなっている（図表32）。

図表31 賃上げの実施額



図表32 賃上げの実施額（男女・年齢別）

| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|----------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 20,000円以上増加 | 27.8 | 12.5 | 25.0 | 0.0 | 14.3 | 18.5 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | 15.4 | 0.0 | 11.3 | 15.3 |
| 15,000円以上20,000円未満増加 | 5.6 | 25.0 | 18.8 | 12.5 | 0.0 | 13.8 | 0.0 | 23.1 | 0.0 | 7.7 | 25.0 | 9.4 | 11.9 |
| 10,000円以上15,000円未満増加 | 27.8 | 25.0 | 6.3 | 12.5 | 14.3 | 18.5 | 21.4 | 7.7 | 11.1 | 7.7 | 0.0 | 11.3 | 15.3 |
| 5,000円以上10,000円未満増加 | 27.8 | 31.3 | 31.3 | 37.5 | 71.4 | 35.4 | 21.4 | 30.8 | 22.2 | 30.8 | 0.0 | 24.5 | 30.5 |
| 5,000円未満増加 | 11.1 | 6.3 | 18.8 | 37.5 | 0.0 | 13.8 | 28.6 | 38.5 | 66.7 | 38.5 | 75.0 | 43.4 | 27.1 |
| 全体 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

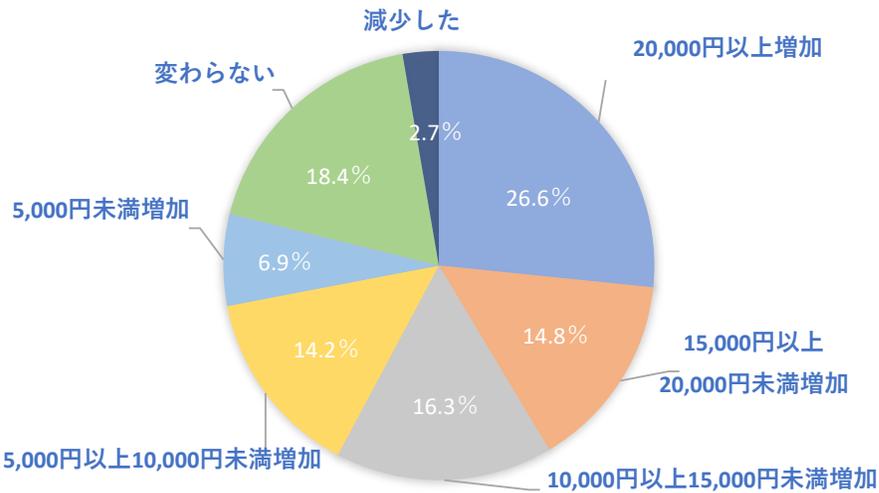
3. 1ヶ月あたり家計費用負担額

1年前と比べた1カ月当たりの家計費用負担額は、「20,000円以上増加」が26.6%と最も多く、次いで「変わらない」が18.4%、「10,000円以上15,000円未満」が16.3%の順となっている。10,000円以上の負担額が増加した割合は、6割に及んでいる（図表33）。

男女別にみると、「20,000円以上増加」は男性の「30歳代」「50歳代」「60歳以上」が約3割で、女性の「30歳代」「40歳代」「50歳代」も約3割で、中高年以上を中心に高い。10,000円未満増加は、「29歳以下」「30歳代」の若い世代が高くなっている（図表34）。

図表34 1カ月あたり家計費用負担額（男女・年齢別）

図表33 1カ月あたり家計費用負担額



| | 男性 | | | | | | 女性 | | | | | | 全体 |
|----------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | 29歳以下 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳以上 | 合計 | |
| 20,000円以上増加 | 15.6 | 30.0 | 24.3 | 31.4 | 32.4 | 26.9 | 18.9 | 30.6 | 27.8 | 29.7 | 21.4 | 26.3 | 26.6 |
| 15,000円以上20,000円未満増加 | 12.5 | 23.3 | 13.5 | 11.4 | 21.6 | 16.4 | 13.5 | 11.1 | 11.1 | 16.2 | 14.3 | 13.1 | 14.8 |
| 10,000円以上15,000円未満増加 | 15.6 | 6.7 | 16.2 | 28.6 | 24.3 | 18.7 | 8.1 | 13.9 | 13.9 | 16.2 | 21.4 | 13.8 | 16.3 |
| 5,000円以上10,000円未満増加 | 12.5 | 16.7 | 13.5 | 14.3 | 5.4 | 12.3 | 18.9 | 25.0 | 11.1 | 16.2 | 0.0 | 16.3 | 14.2 |
| 5,000円未満増加 | 18.8 | 10.0 | 5.4 | 0.0 | 5.4 | 7.6 | 13.5 | 2.8 | 8.3 | 2.7 | 0.0 | 6.3 | 6.9 |
| 変わらない | 25.0 | 10.0 | 21.6 | 14.3 | 10.8 | 16.4 | 21.6 | 16.7 | 22.2 | 13.5 | 42.9 | 20.6 | 18.4 |
| 減少した | 0.0 | 3.3 | 5.4 | 0.0 | 0.0 | 1.8 | 5.4 | 0.0 | 5.6 | 5.4 | 0.0 | 3.8 | 2.7 |
| 全体 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

※網掛けは各項目で最も割合の高い年齢層を示す。

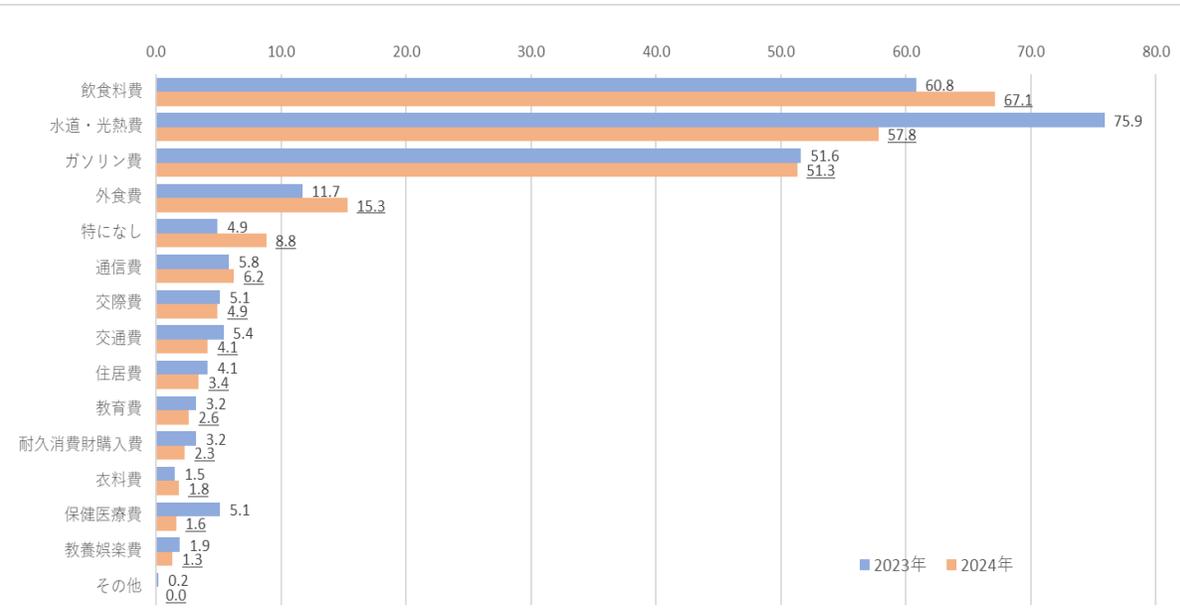
4. 負担が重くなった費目

1年前と比べて家計の負担が重くなった費目は、「飲食料費」が67.1%（前年比+6.3%）、次いで「水道・光熱費」が57.8%（同△18.1%）、「ガソリン費」が51.3%（同△0.3%）である。「飲食料費」は原材料費の高騰により様々な商品が値上げしており、生活に身近であるゆえ負担が重くなったと感じている人の割合が高い。「水道・光熱費」は高止まりしているが、電気料金の国からの補助もあり前年に比べると割合が△18.1%低下している。食品や飲料など生活必需品の値上げやガソリン、光熱費の価格の高止まりが家計の大きな負担になっている（図表35）。

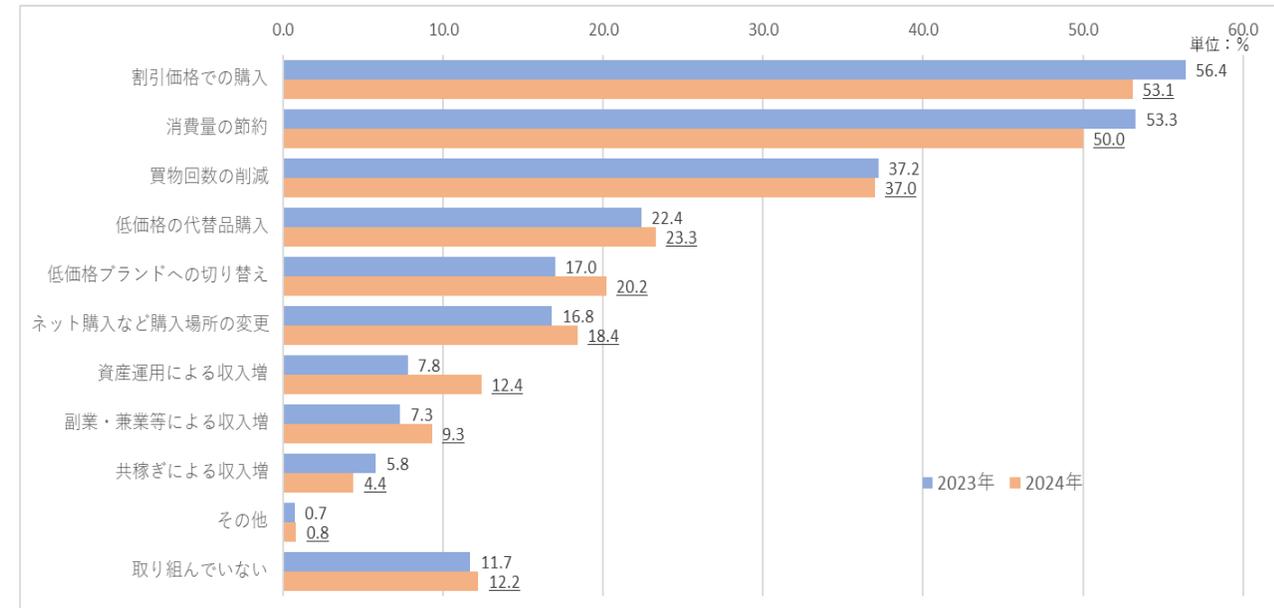
5. 家計負担を減らすための取り組み

「取り組んでいない」は12.2%（前年比+0.5%）であり、県内の9割弱の家計では、物価上昇による負担を軽減するために何らかの取り組みを実施している。具体的な取り組みをみると、「割引価格での購入」が53.1%（同△3.3%）と最も高く、次いで「消費量の節約」が50.0%（同△3.3%）、「買物回数の削減」37.0%（同△0.2%）など、支出を抑える取り組みが目立っている。一方、前年に比べ、資産運用、副業・兼業など収入を増やす取り組みも多くなってきている（図表36）。

図表35 家計の負担が重くなった費目



図表36 家計負担を減らすための取り組み



6. 「物価上昇の家計への影響」に関する県民の声

今回の調査では、「賃上げと物価高による家計への影響」に関する数多くの意見をお寄せいただきました。誌面の関係上、一部抜粋してご紹介します（コメントの主旨が変わらない範囲で一部編集しています）。

| 性別 | 年齢 | 自由意見 |
|---|-------|---|
| 男性 | 29歳以下 | 給料は変わらないのにガソリンやら食料品代は上がっている。税金も何重にも取られている。少子化を改善したいのであれば増税よりも他にやることもあると思う。SDGsなんてやるのであれば古い車に課税するやり方は矛盾している。 |
| | | 賃上げは全然できていない。だか物価だけは上がり続けている。 |
| | 30歳代 | 物価高に加えて、税金の負担も多く、給与が増加しても生活は結果的に非常に大変なことに変わりはない。 |
| | | 物価高を上回る賃上げが行われないと家計は苦しくなる一方である。 |
| | 40歳代 | 光熱費はもともと節約していたので、削減できないため物価高を実感した。 |
| | | 賃上げ政策をとっておきながら、子供を理由にした社会保険料のアップや、使いもしない森林環境税を徴収するといったことで生活環境の悪化は必至であろう。 |
| | | 常に節約するようになった。物価に敏感になった。 |
| | 50歳代 | 物価上昇に賃金が追いついておらず、今後徐々に生活は厳しくなっていくと思う。 |
| | | 比較的安価に購入できた野菜の価格が1.5～2倍になっていて食費が増えている |
| | | 賃上げは大企業だけで、地方では上がらないのに物価だけが上がる。国は大企業だけで判断しないでほしい。 |
| | 60歳以上 | 賃上げが殆んど無いのに物価上昇のスピードが尋常ではないため、家計内の収支のバランスが取れなくなっている。 |
| | | 年齢的に賃上げ等の恩恵はない。 |
| 地方の中小、零細企業には賃上げは難しいでしょうね。個人、家庭の経済格差を少なくし、年金で生活できる安心を与えて欲しい。 | | |
| 夕食の品数が減ったのと、今まで頻繁に食べていた物の回数を減らした。 | | |

| 性別 | 年齢 | 自由意見 |
|----|----------------------------|--|
| 女性 | 29歳以下 | 数ヶ月ペースで食べ物から色んな商品全て値上がりしているのに、給料は上がらないどころか税金ばかり引かれる。我慢我慢で生きてる意味がわからない。人生を楽しむためにじゃなく、その日その日を生きていくために働いているそう感じる毎日。 |
| | | 物価高による賃上げは国がどうしようかと、現状義務では無いため会社側の判断に委ねる形になっているのでなかなか難しいと思う。そこを埋めるためには義務化をするのか、税額を下げるかのどちらかしてもらわないと困る。 |
| | | 賃金が上がっても税金が上がっており、対して手元に入る金額が変わらない。物価高騰によりお店から出しているプライベートブランド商品を買ったり、大容量の洗剤使用や缶詰や飲み物など日持ちがするものはまとめ買いをして保管している。 |
| | 30歳代 | 去年は賃上げがあったが、中小企業だと毎年上げるのも難しいようで、今年は物価高の影響が家計に大きく響いている。今後も物価高が続くと思うと不安。 |
| | | 小さい子供より中学、高校生の子供の方がお金がかかる。食費にしろ部活動にしろ。低所得、住民税非課税世帯ばかり給付金増やして多子家庭には何も無い。 |
| | | 独身に対してもなにか金銭的補助があれば良いと思う。 |
| | 40歳代 | 賃金を上げて物価が高ければ今までと変わらない。子供がいる家庭は色々免除などお得があるのに結婚してない独り身には何もなくて生活は大変だと思う。 |
| | | よく言われてる通り賃上げが物価高に追いついていない。 |
| | | 給料は今後転居により減る予定。住宅手当が付かなくなるため。また住宅購入の予定もあるため、全体的に節約が必要となる。 |
| | | 一部企業のみ賃上げでほとんどの中小企業は変わらないのではないかと。給料は残業や手当で増えた。しかし、増税や物価高があるので増えた手取りは節約投資を集中的に行いたい。 |
| | 50歳代 | 衣食住はどうしても変わらないので税金とか光熱費を何とかして欲しい。 |
| | | 定期昇給はあっても交通費に変化は無し、食費や光熱費は節約してるが、そのせいでイライラすることもある。心も家計も豊かになるよう暮らしたい。 |
| | | 少しばかり賃上げしても、昨今の物価高騰では家計は楽にならず何を買うにもレジャーを楽しむにも考えてしまう。 |
| | | 大きなローンが完済したので、物価高とはいえ、賃上げもともない、生活に余裕がでてきている。しかし、老後資金の事を考えると貰えるモノはもらい、出費は抑えたい。 |
| | | とにかく何でも高くなっている。割引の商品しかかごに入れられない。 |
| | 再雇用になったら収入が減るので老後が不安でしかない。 | |
| | 60歳以上 | 食料品を購入する際はしっかり値段を確認しながら対応しなければならない。 |

IV さいごに

当研究所の「2024年夏季ボーナス推計」によると、県内の2024年夏季ボーナス総支給額は、民間企業が前年比+2.8%、官公庁が+3.5%、合計で前年比+2.8%と増加する見通しである。一方、民間企業の1人当たりボーナス支給額は、所定内給与と支給月数の増加により2年ぶりに増加する見込みである。

今回のアンケートによると、県内で賃金が引き上げられた（引き上げ予定）の割合は3割に留まっており、6割は賃金が変わらない状況にある。今後1年間の暮らし向きについては、約9割が現状もしくは悪くなると想定しており、先行きに対する不透明感は依然強い状況にある。

大手企業を中心に賃上げが行われているところだが、物価上昇に伴う実質賃金の低下が続いており、将来に対する不安感などから、消費自体に慎重な姿勢が続くことが懸念される。そのためにも物価上昇を上回る継続的な賃上げが地方の中小企業においても行えるような環境整備、消費を促す環境整備などの更なる政策が待ち望まれる。

（担当：嵐 俊勝）